【寄　稿】懐かしの風景　「　嫁　入　り　」

昭和30～33年：嫁入り行列

かわいらしい鬼さんの墨彩画などが有名な画家。
これまでに四千点以上。全国各地で個展を開催されている。
大阪芸術大学短期大学部教授。
郷土史研究家。
著書多数。

植田・井上孝博

この写真は昭和３０～３３年ごろの植田区での嫁入り行列の風景です。
村の人々は嫁入りを「嫁入(よめ)り」と言いました。金襴緞子に身を飾り、高島田に髪を結い、角隠しをつけて白粉(おしろい)塗って、とても綺麗で、「長持ち唄」を歌う仲人(なこど)さんを先頭に行列が続き、結婚の日だけは村中に特別な時間が流れたものです。女の子はお嫁さんに憧れて見惚(みと)れ・・・でもお嫁さんの弟は、どこと無くさみしく思ったものです。

嫁入りの荷(に)は、嫁（とつ）ぎ先まで、道に迷っても決して逆戻りしてはいけないと云うのも、嫁入りで出戻りにならぬようにとの云い伝えを守ったものです。

三三九度の挙式も披露宴も家で行い、宴会は大きな家(うち)では近隣総動員の手伝(てった)いで三日三晩も続きました。この日は「かしわ」をこなしたり、酒屋さんから日本酒を沢山運んできたり、昭和２２年生まれの私が幼心に特にうれしかったのは、その日の御馳走は日頃めったに食べられない牛肉のすき焼きだったことです。

結婚披露宴が一段落すると、次は少し日を空けて、新郎は「友達呼（ともだちよ）び」といって、新郎よりも一歳年上と一歳年下の村の男性全員を家に招いて宴会をして振舞い、新婦は「茶沸（ちゃわ）かし」といって、新婦よりも一歳年上と一歳年下の村の女性全員を、「友達呼び」とは別の日に改めて家に招いて、お菓子（コーヒーやケーキ）を振舞い、これを「上下(うえした)」と云って、それぞれ村人の仲間に入（はい）るための、「顔つなぎ」をする習（なら）わしをしたものです。
・・・近頃から想えばとても懐かしい儀式(セレモニー)風景です。

昭和30～33年：嫁入り道具
：ボンネットトラック　釈迦の池堤防付

昭和42～43年：嫁入り行列
釈迦の池堤防付近